

Title	Geotemporal Diaspora: The Art of Absence in the Third-Generation Holocaust Jewish American Writers' Fiction
Author(s)	篠, 直樹
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96166
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (篠 直 樹)

論文題名

Geotemporal Diaspora: The Art of Absence in the Third-Generation Holocaust Jewish American Writers' Fiction
 (時空間的ディアスポラ——ホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家のフィクションにおける空白の技法)

論文内容の要旨

課程博士申請論文“Geotemporal Diaspora: The Art of Absence in the Third-Generation Holocaust Jewish American Writers' Fiction”は現代のユダヤ系アメリカ作家による作品を技巧的特徴に着目し分析したものである。議論にあたり、現代のユダヤ系アメリカ人に関する世代論的パースペクティブを導入した。ホロコースト第三世代というホロコーストを体験した世代の孫世代に属する現代のユダヤ系アメリカ作家のフィクションの技巧的特異性は個々の作家が抱く世代的自意識を象徴する。以上の仮説的前提において重要となるのは「距離」である。現代を生きるユダヤ系アメリカ人には先祖の体験、特にホロコーストに対して、時空間的距離が存在する。こうした距離は今後も否応なく拡大するが、Walter Benn Michaelsが論じるように、ホロコーストを語ることで自分がユダヤ人の文化の一部になっているとすれば、ユダヤ系アメリカ作家にとっての喫緊の課題とは、ホロコーストをいかにして語り継ぐのかという方法の問題となる。さらにいえば、2019年に起こったコロナ・パンデミックによって、ユダヤ系アメリカ人はヨーロッパ大陸における先祖の体験を追認する手段をますます喪失したと思われる。こうした状況において、現代のユダヤ系アメリカ作家は先祖 (の体験) に対して心理的距離を感じる。そして、彼らが抱く心理的距離感はテキストにおける空白として表象されるのだ。また、ホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家のテキストにおける技巧的特徴は無意識的なものでもあるが、多分に意識的に構築された方略でもある。先祖の体験に届き得ないという感覚を利用し、第三世代の作家のフィクションは物語言説と物語内容の両面において空白の表象を実践するのだ。

第三世代のユダヤ系アメリカ作家と距離に関連してもう一点重要となるのは、テキストの物語世界が強烈に異化される点だ。ここでいう異化とは時空間的な異化効果を指す。先述した通り、現代アメリカと先祖の暮らしたヨーロッパには距離が存在する。また、過去に存在したユダヤ人居住区の多くは消滅している。現代を生きるユダヤ系アメリカ人が先祖の生活を知るには書物や映画といった媒体を経由する他ない。ある意味で、彼らは過去から疎外されている。こうした状況下で、第三世代の作家は時間空間的異化効果をテキストに施しルーツへの接近を試みる。逆説的ではあるが、距離を意識するからこそ現代のユダヤ系アメリカ作家はルーツを志向するのだ。本論文は、ホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家が採用するテキスト戦略をユダヤ人が長らく置かれてきた状態／常態であるディアスポラという語を使用し、「時空間ディアスポラ」として術語化する。ディアスポラという語を採用することの妥当性は次の二点から明らかである。まずは文学作品の異化効果、時間と空間の両面においてテキストを過激に異化する技巧的特徴を端的に例証するからだ。ディアスポラという語が内包する二つの次元 (時間性／空間性) を導出し、時空間的ディアスポラとして明示化する意図もここにある。二点目として、ディアスポラは心的距離を表象する語でもあるからだ。先祖と自らの間に存する懸隔を意識し、疎外感を空白として表象する第三世代の作家の技法を説明する際、時空間的ディアスポラという語は適切である。こうした術語を援用し、ホロコースト第三世代に属するユダヤ系アメリカ作家による作品を分析、個々のテキストの独自性と共通性を明らかにすることが本課程博士申請論文の目的である。そして、個々のテキストにおける技巧的特徴を分析した後、結論付けるのは作家のテキスト戦略たる時空間的ディアスポラが彼らの世代的自意識を様々な方法で反映する事実である。

第一章は、Jonathan Safran Foerの*Extremely Loud & Incredibly Close* (2005) が分析対象となる。主人公Oskar Schellはニューヨークに住む七歳の少年である。9/11で父Thomas Jr.を亡くしたOskarは父の死をトラウマティックな記憶として反芻する。Oskarは父の死を受容できず、喪失感をスクラップブックに表現し、彼の語りには物語言説上の空白として立ち現れる。他の重要な語り手として、Oskarの祖父Thomasが登場する。Thomasは第二次世界大戦後ドレスデンからニューヨークへやって来たドイツ系移民だった。彼は故郷で許嫁のAnnaを亡くした失意の中、失声症に陥る。その後Annaの妹 (Oskarの祖母) と恋仲になるが、妻が妊娠した事実を知るや単身ドレスデンへ舞い戻る。幾度の喪失体験を経たThomasの語りもまたページ上の空白を構成する。主な語り手の最後はOskarの祖母だ。彼女の

語りはOskarへの手紙という形式をとる。OskarやThomasと異なり、祖母は健康的にみえるが、AnnaやThomas Jr.との死別、Thomasが自分と息子を置きドレスデンへ去った事実等から、彼女もトラウマティックな記憶を抱える。彼女の手紙にもまた空白を利用した描写が頻出する。三者の主な語り手は喪失感やトラウマを共有し、彼らの感情は*Extremely*の物語言説を空白で満たすのだ。空白の表象を念頭に置き、Oskar-祖父-祖母、共通の喪失はThomas Jr.の死であるが、重要となるのは第二世代の死が第三世代と第一世代に交流をもたらす点である。第一章は、*Extremely*における空白は喪失感を表象し、同時に異なる世代を架橋するのだと結論付ける。

第二章はNicole Krauss, *The History of Love* (2005) を扱う。主な語り手として四人のキャラクターが採用される。プロットで前景化されるのはAlma SingerとLeopold (Leo) Gurskyである。Almaはニューヨークに住む少女で、父Davidを病気で亡くしている。Davidが死んで以来、母Charlotteは自室に引きこもり、弟Birdは奇行に耽るようになる。スペイン語に堪能な母が翻訳を依頼された小説“*The History of Love*”という*History*と同名の作品内小説の謎を解こうと試みるAlmaは後にLeoと出会う。Leoはポーランド系移民の老人で、生業とした錠前屋を引退し現在はアパートの一室に隠居している。数年前の心臓発作の後、Leoは死への恐怖にとり憑かれ、他人から見られることを求めてやまない。Leoが恐怖するのは、誰にも顧みられず孤独に死ぬことなのだ。死に対する強迫的恐怖からLeoはBrunoという隣人を発明する。明示されることはないが、BrunoはLeoが抱く死への恐怖が生んだLeoの分身である。Brunoと生活を共にする中、Leoは自身が若い頃に書いた“*The History of Love*”の原稿を発見し、Almaと邂逅を果たす。本章が焦点を当てるのはテキストに亡霊的存在が繰り返し表象されることで、物語における現在という時間性が錯誤される点である。亡霊とはBrunoであり早世したLeoの息子Isaacを指す。不在の謂いたる亡霊により、テキストの構造は常に現在からずらされるのだ。こうした文脈において、作品のインターテキストチャリティも重要となる。Kraussは本作で過去の偉大な作家を意識的な方法で登場させる。過去の作家・作品を導入することで、テキストは一層過去という時間性を帯びる。本章はJacques Derridaの『マルクスの亡霊たち』における議論を援用し、*History*が時間と空間の両面で異化される点を指摘する。また、分散的な物語構造は亡霊的存在により生成される点を例証し、そうしたテキスト戦略はKraussのホロコースト第三世代としての自意識を反映するのだと結論付ける。

第三章は、Michel Chabonの*Yiddish Policemen's Union* (2007) をとりあげる。主人公、Meyr LandsmanはSitkaの刑事だ。Sitkaとはユダヤ人がアメリカから借用した土地だが、近く本国へ戻る運命にある。*Yiddish*の物語世界はオルタナティブ・ワールドに置かれている。息子Djangoの中絶と元妻Binaとの離婚を経て、Landsmanはホテルに暮らし始める。仮住まいとするホテルで青年Mendel Shpilmanが殺害され、Landsmanは相棒Berko Shemets、元妻で現在は上司のBinaと共にMendel殺害事件を捜査するが、彼らを待ち受けるのはアメリカとユダヤ人テロ組織による謀略である。本章が着目するのはLandsmanが息子Djangoを失うこと、ユダヤ共同体Sitkaにとっての息子／救世主Mendelの死、そしてSitkaの近い将来における消滅が並置され語られる点だ。Landsmanは息子の死とMendelの死を重ねる。Landsmanが二人の息子を同一視することで、捜査は進展しプロット進行は加速する。結果、ユダヤ共同体の解体が近づくのだ。また、二人の息子の死と消滅する共同体との相同性をふまえ注目するのはSitkaに描出される未決の時間性である。共同体Sitkaにおける時間的未決性は主人公の状態の特徴とリンクし、ユダヤ的共同体のモデル——脱領土的で異質なものを包摂するアサイラムとしての共同体が提示される。本章は次のように結論付ける。すなわち、共同体における未決の時間性が象徴するものとは、Chabonの世代が共有する未来に対する不安感、「ホロコーストやディアスポラが再来するのではないか？」という漠とした恐怖であるということだ。

第四章はNathan Englander, *Dinner at the Center of the Earth* (2017) を分析する。*Dinner*は複数の語り手を採用し、時間／空間的設定は常に変化するが、メインプロットはイスラエルのスパイZが本国を裏切り収監され独房で死ぬまでの課程を描く。*Dinner*が主題化するのは倫理であり、議論にあたって本章はEnglanderの短編“Free Fruit for Young Widows” (2012) 内の父子の対話を検討し、*Dinner*の読解に役立てる。“Widows”で語られる対話は父Shimmyと息子Etgarのものであり、Shimmyの友人Tendlerの幼少期の体験が話題となる。Tendlerはホロコースト・サバイバーとして収容所を逃げ延び帰郷を果たす。だが、Tendlerは女中一家から邪魔者として遇され、殺されかける。そこでTendlerは彼らを殺害する。Tendlerに関するエピソードを聴きEtgarは誰を生かし殺すべきかを語る。だが、Shimmyが批判するのはEtgarが事後的にTendlerの行動をジャッジする様であり、個々人のコンテキストを蔑ろにする態度である。コンテキストの重要性を念頭におき、語りの複数性と循環性を意識し、読者／作者が中東問題を扱う物語を読む際の倫理的困難性を考察する。そして、*Dinner*が主題化する倫理の性質は、作家のユダヤ系アメリカ人としての二重のアイデンティティに関わると結論付ける。

以上の作品分析を踏まえ、時空間的ディアスポラという術語の妥当性を考察し、ユダヤ系アメリカ作家が創造するフィクションが今後、どのような役割を果たすのか終章にて示す。とりわけポスト・ホロコースト世代のフィクションが後続の作家にとって倫理的参照点となり得ることを提示し、本課程博士請求論文の結論とする。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (篠 直 樹)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 片 渕 悦 久
	副 査 大阪大学 教授 山 田 雄 三
	副 査 大阪大学 准教授 森 本 道 孝
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： Geotemporal Diaspora: The Art of Absence in the Third-Generation Holocaust Jewish American Writers' Fiction

学位申請者 篠 直樹

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 片 渕 悦 久

副査 大阪大学教授 山 田 雄 三

副査 大阪大学准教授 森 本 道 孝

【論文内容の要旨】

本論文は、現代のユダヤ系アメリカ作家による諸作品を、ホロコースト関連の主題的関心とそれを表現する技巧の特徴に着目し考察したものである。本論文は英語で執筆され、序論、全4章からなる本論、結論から構成されている。論文の分量は後注と参考文献リストを含め全体でA4判114ページ、本文の語数は約30,000語である。

序論で筆者は先行研究を丹念にたどり、ホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家が採用する物語戦略の説明に、ユダヤ人が長らく置かれてきた状態／常態であるディアスポラ（離散）の概念を応用することが、物語の内容・表現両面を考察するのに有効であるという仮説を立てる。これをふまえ術語として「時空間的ディアスポラ」(geotemporal diaspora)を提案し、現代ユダヤ系アメリカ文学を代表する4人の作家それぞれのホロコーストにまつわる物語戦略の特質を探るといふ本論文の目的を提示する。

第一章は、Jonathan Safran Foer の *Extremely Loud & Incredibly Close* (2005) に登場する主人公兼語り手が9.11同時多発テロ事件により父親を亡くしたことにより経験する喪失感や精神的トラウマが物語の空白として表象されることに着目し、そうした空白が主人公とその他の登場人物との間で共有され、精神的結びつきとして昇華されると指摘する。表現上の視覚的空白の表象からみえてくる、世代を超えたこうした精神的交流の過程をこの小説は物語化していると筆者は解釈する。このように、*Extremely* における空白は喪失感を表象しながら、同時にトラウマの共有と継承により、世代間の意識の交流を促し、たがいを精神的に癒すと結論づける。

第二章ではNicole Krauss の *The History of Love* (2005) を取り上げ、物語テキストに繰り返し表象される亡霊的存在が現在という時間性を錯誤させる物語的装置になっていると喝破する。不在の謂いである亡霊は物語内容のみならず物語言説をもずらし続けるストーリーテリングの効果を担っており、こうした不在の存在が拡散的で不安的な物語において前景化されるのは、この小説が時間性と空間性の両面において物語的に異化されることを本質的に志向しているからであり、だからこそ中心人物たちを取り巻く物語的状況が「分散」という名のもとに、Krauss のホロコースト第三世代の自意識的物語戦略として効果的にテキスト化されると筆者は主張する。

第三章は、Michel Chabon の *Yiddish Policemen's Union* (2007) におけるユダヤ人共同体の行く末に焦点を当てる。歴史改変的な物語世界において、テロリストグループによる謀略によりユダヤ共同体が解体の危機にある

近未来を主人公は幻視する。筆者はそこにやがて消えゆく運命にある共同体における時間的未決性がこの小説のテーマ的関心であると洞察し、脱領土的で異質なものを包摂するユダヤ人共同体における未決の時間性が象徴するものとは、Chabonの世代が共有する未来に対する不安感、すなわちホロコーストやディアスポラの再来を予見する漠然とした恐怖であると解釈する。

第四章はNathan Englander, *Dinner at the Center of the Earth* (2017)における複数の語り手によるストーリーテリングの特質について考察し、語りの交錯から生じる時間／空間的設定の変化をとおして、イスラエルのスパイが本国を裏切り収監され独房で死ぬまでの過程が物語的に多義性を帯びて描かれると主張する。筆者はこの小説が主題化する倫理の問題は、ユダヤ系アメリカ人としての作家の二重のアイデンティティへの意識から生じており、語りの複数性と循環性と連動して物語に前景化される複雑な物語言説の解釈により読者は中東地域にかかわる諸問題をはらむ倫理的ジレンマを普遍的問題として作者と共有することになると結論づける。

結論では、時空間的ディアスポラという術語の妥当性を総括し、ユダヤ系文学の伝統とりわけ惨禍の記憶を継承・共有しようと試みるフィクションの一使命とは語り続けることであるという見解を示す。筆者はホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家のフィクションがホロコーストのみならず人類に内在する悪／暴力（の歴史）を考察するための倫理的参照点となりえると主張する。語り続ける「方法」を生み出すことが物語戦略の最重要課題であり、時空間的な異化効果によって同時代から距離を生成し、惨禍の記憶への接近を試みることによって、不在の記憶を継承・共有する試みを続けるのだという、ユダヤ系アメリカ作家が創造するフィクションが今後果たすべき役割について示唆的かつ発展的な結論を提示している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、現代ユダヤ系アメリカ作家4人の比較研究であり、21世紀はじめのユダヤ系アメリカ文学史論とも呼ぶことのできる考察に独創性が認められる。本論文における考察に特筆すべきは、現代のユダヤ系アメリカ人に関する世代論的パースペクティブを導入し、ホロコースト第三世代に相当する作家のフィクションにおける技巧的特異性が、考察の対象となった個々の作品に表現された世代的自意識を象徴するという仮説を立て、その論証のために各作家の物語テキストを緻密に読解した点である。正確かつ洞察に富むテキスト読解は、現代アメリカに生きるユダヤ系アメリカ人には先祖の体験、とりわけホロコーストに対して、地理的・時間的距離が存在するという主張を裏づけるものであり評価に値する。また4人の作家が先祖（の体験）に感じる心理的距離を物語において多様に表象した点に注目し、先祖の体験に届き得ないという感覚を、ストーリーの物語言説と物語内容の両面において空白や不在の感覚をとおして書き込もうとする創作意識のあり方を示しているという見解は、綿密な読解と考察から生まれた、これまでのユダヤ系アメリカ文学研究になかった斬新なものである。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。「時空間的ディアスポラ」の定義に柔軟性をもたせ、4作家がもつ時空間的な物語意識を包摂する概念とした点は、作品分析に一貫性を担保する論述的戦略であると理解できるが、いっぽうでそのことが却って鍵概念の拡大解釈を招き、「ホロコースト」そのものについても意味の拡張を誘発し、ユダヤ系第三世代作家を取り巻く文学状況の多様性が見えにくくなっている。こうした点へのさらなる考察の深化があれば、4作家が共有する文学的特質と現代ユダヤ系アメリカ文学と現代英語圏文学の全体像との関係性がより明確に提示できたであろう。

しかし、これらの点は本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。